

昨年未の忘年会にご参加頂きました篤農家の皆さま、昆編集長・浅川副編集長、ありがとうございます。梁山泊のようなスゲー仲間たちという財産を4年間で築いていたのだと、あらためて実感できました。今年の励みにさせていただきます。

山形ガールズ農場に入社した昨年の新入社員4名の内、2名が11月に退社しました。4名といっても1名は将来の農場レストランのシェフ候補だったので農家の台所で預かっていました。ですから農場で働いた3名中2名が潰れてしまったという結果です。4月の研修期間を終え、5月から山形に移り住み、6カ月間連続怒涛の初体験をし、生きることを大変さを味わい、苦痛を乗り越えて来たのに、結果は挫折という経験しか与えられなかったのです。

二人とも、代表の菜穂子ではなく、僕に辞めたい意思を伝えてきました。悲しむ菜穂子には言いづらいという気持ちと、もしかして自分の気持ちを変えてもらえるかもしれない、という潜在意識があったのではないのでしょうか。結果、僕は無能でした。弱った精神を理解できない僕は、戦場から逃げるものを卑怯者、そして継続することによる信用の重要性を語りましたが、一度折れてしまった人間を直すことができませんでした。

最悪な待遇の国立ファームに入社して来る若者は弱者ですが、己に試練を与えることで強者の精神を身に付けたいと願って生きている者です。しかし半数以上が結果挫折して去って行きました。この結果は僕の意思でもありません。何の実績もなく大学を卒業して来た人間が、一念発起してただで強者になれたら、強者だらけになって気色の悪い世の中になってしまうからです。

しかし、今回の一件で少し反省しました。自信という成果を出すまで生き残ることのできる社員が少しでも増える環境を、少しでも増やしてあげようと思います。

国立ファームを人間の身体に置き換えると、僕が脳で平社員が指（末梢神経）でしょう。菜穂子は文字通り片腕になります。脳が片腕に石焼き芋を作るように命じました。芋を焼いている時に2本の指が熱く焼けた石に触れてしまったんですが、末梢神経が脳まで届いておらず、痛みを感じていません。どんどん焼けていく指に気付いて片腕が腕を引けば良かったのですが、片腕の菜穂子は新米経営者で指の痛みをまだ理解していませんでした。

そこで、脳と指である末梢神経を連結させるための脊髄（せきずい）が必要になります。脊髄が指の痛み

を感知して、脳である僕に知らせて来るべきなのです。状況を脳が理解すれば、菜穂子にまず焼き芋から手を離すように伝え、火傷の度合い次第で、水水に漬けるのか、オロナイン軟膏を塗るのかを指示するようになり、東京本社の仕事に配置転換することができていけば、焼きただれた指を切断せずに済んだ可能性があったはずなんです。

現場の社員のために脊髄という部署を思いつき、ここを社長室と呼ぶことにしました。すると、社長室は会社として業務を改善するためにも当然利用できることに気がきます。

今後は、脊髄が末梢神経から仕入れた情報を逐一脳に伝達し、脳からの指示を脊髄が指先にまで伝えられる組織を創り上げます。そしてその結果、それぞれの片腕の連携も脊髄を経由させることで大きく改善されることでしょう。左手でボールをキヤッチして、すぐさま右手で投げるといふ行為すら、まともにできていなかった会社ですから。

将来、この脊髄が成長して、脊髄反応と呼ばれる条件反射ができるようにならなければ、国立ファームに未来はないでしょう。経営者が反省と改善を毎年繰り返し返さなければ、会社は成長しません。そのための雨と考えて、地を固めます。

国立ファーム有限公司

高橋がなり

アグリの猫

～早く「虎」に変わるんだ！～

第46回

末梢神経と脳を繋ぐ脊髄を創り上げる